



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑩～

ちからのカタチ 2



松岡園子

色々な場所で私自身の体験をお話しさせていただく中に、統合失調症の症状がひどくなってしまった母と 12 歳の私が 2 人で神戸の家で暮らすのを心配した親戚の取り計らいで、私は奈良の児童福祉施設へ入所することになったエピソードがあります。これは今から 30 年ほど前のことですから、子どもの意思も尊重されるように変化してきた現在ならまた違った対応になったかもしれないと思うのですが、当時の私はその決定に納得がいかず、一度入所した児童養護施設をたびたび脱走して、ついには母と 2 人で無理やり神戸の家へ戻って暮らし始めました。

しばらく経って神戸の中学校へ転入したときにも、中学校の先生には自分の母の病気のこと、家事をしなければならなかったことを相談したくなかった（相談すると中学校の先生は、きっと児童相談所とつながっているから、一度そうされたように、児童養護施設へ入所させられてしまうと思ったから）ということを経験。支援者の方々の前で話すと、「そうですか……」と、ショックを受けている反応が返ってくることが多いです。私が当時いちばん頼りにしていたのは、私の選択した生活を強制的に変化させられる心配のない、友達のお母さんです。

子どもの支援をしたいと日々お仕事をされている支援者の方に、いちばん相談したくないなんて、どうしてそのような悲しいことが起きてしまうのでしょうか。相談をされると、なんとかしてあげたいと思う、そのなんとかする方法が、困難な環境自体を取り上げてしまうことだけとは限らないのではないかと思います。その子ども自身が、困難な環境をなくしてほしいと望んでいるなら、環境を変えることが必要な場合もあると思いますが、当時の私の場合は、環境を変えずに母と暮らしたいという気持ちが強かったのです。それでは周りの人は、深刻な状況になるまで放っておけばよかったのかというと、そうではなく、乗り越えられるようなサポートをしながら「見守っているよ」というスタンスで関わってくれている人がいると思えたからこそ、安心して心を開くことができたのではないかと思います。

当時の私も、誰にも相談したくなかったわけではありません。理解のできない行動がみられ、まともに話の通じない母と一緒に生活も、いつもわからないことだらけで不安で、相談相手を求めています。でも、相談相手を選んでいたので。相談できる人とできない人、その違いは何なのでしょう。私はその一つに、支援をする側の「子どものもつ力の認識」の違いがあるのではないかと感じています。安心して相談できた人は、私のもつ力を信じてくれた人です。

誰にでも子どもの成長に伴って「この年齢では、まだできないだろう」「これぐらいの年齢になったら、できるようになるだろう」と感じる基準があると思います。その基準のもと、一般常識とされているもの、自分の経験、家族や友人など身近にいる人からきいた話などでしょうか。

たとえば12歳になった私の子どもが、電車を使って行ったこともない3県向こうの〇〇駅までひとりで行きたいと言い出したとしても、「わからない時は人に訊ねてなら、行けるだろう」と思えるのは、自分が12歳の時にそうしたことを経験したからです。そうしたことを経験したことのない人からすると、「そんな危ない、帰って来られないかもしれない」と思うかもしれません。自分が親なら、行ってはいけないと禁止するところかもしれません。相談した子どもの側としては、もう親には相談しないでおこうと思います。だって相談したところで、禁止されてしまうのですから。さいわい許可が出たとしても、子どもの側も喜んで準備もなしに飛び出したりはしないと思います。自分なりに行程を考えたり、調べたりするのではないのでしょうか。自分ごとになると、人は真剣になり始めます。

親の側も、たとえそれを許可したとしても、放っておくわけではないでしょう。帰ってくるまで、それは心配でたまらないと思います。メモを持たせたり、復唱させたり、どのように行くのかの確認、本人が困った時の対策、連絡先の確保など、子どもが安全に帰ってこられるように、最善を尽くそうとするはずです。

信じて、最善を尽くして、やらせてみる。この親と子の関係は、支援者と対象の子どもに置き換えてみることもできると思います。先ほどの例では、もしかしたら、危ないからだめだという他に、やらせてみて面倒なことになったら困るという理由も考えられるかもしれません。先回りして見守ることは、かなりエネルギーを使うことです。しかし、困った時には、すぐに助けを求められるサポートを受けながら1人でやり遂げた経験は、その人の自信になり、困難に直面しても切り抜ける力を高めてくれるのではないのでしょうか。

先日、歌の先生をしている方から筋肉の話を聞き、なるほどと思ったことがあります。人の表情をつくるのに関わる筋肉は、およそ20〜30種類あるとされているそうですが、そこに筋肉があることを知らずに生活をしていると、次第に衰えてくるそうです。しかし、「ここに筋肉がある」と認識し動かすようになると、筋肉が鍛えられ、表情も豊かに変化してくることのこと。そこで、それまで意識していなかった口の周りの筋肉（口輪筋）を動かすエクササイズをするようになり1カ月ほど経つと、筋トレ効果が出だしたのか、口角を上げ

た笑顔を作りやすくなったと感じます。

筋力だけではなく、「ちから」と名前のつくものは、まずはその力が「ある」と認識することが第一歩で、認識しながらその力に負荷をかけ、鍛えることができるのだとその話をききながら感じました。体力、精神力、想像力……さまざまな力が私たちを支えています。

「子どもの困難を乗り越える力を高めるには、どうするのが良いのでしょうか？」という質問を福祉や教育関係の支援者から受けることがあります。まず第一歩は、子どもにも困難を乗り越える力が「ある」ということを周りの人が教えることではないでしょうか。そのためには、教えようとしている側の人、人にはそのような力があり、それは高めていくことができるということを完全に信じていなければ、教えることはできません。私が福祉や教育関係の仕事をされている方からそのような質問をいただくということは、子どもは困難を乗り越える力が弱い、力がないなどの認識をもたれている方が多いのかもしれない。

力の認識は、その人のそれまでの経験によるものではないでしょうか。力は発揮する対象があって初めて認識できるものです。対象に直面した後にはかわからない力を高めることができると思えるには、体験や反復を通じて力を高めていった、その人の実感が必要なのではないかと思います。皆が同じ体験をしてきているわけではありません。勉強や仕事、スポーツを通じて、また逆境を体験し、それを乗り越えることで力をつけていった人など、その過程は多種多様で、目の前の子どもと同じ体験をしたことがあるかどうか考えてもらおうと、ないことの方が多くはないのでしょうか。

私自身の体験で振り返ると、経験豊富な年配の方や、若くても苦難を乗り越えてこられた方などからは、母とふたりの生活を応援してもらえた気がします。同じ体験をしてきたわけではないけれど、困難な状況に直面し、それを乗り越えてきた方には、その状況や、乗り越える過程を想像しやすいのではないかと思います。だからといって、今から苦難を体験することをお勧めしてはなりません。実際に体験しなくても、想像力で補える部分は大きいと思います。サポートをしたいと考えている対象者の話を聴き、想像して理解を深めることで、新たなことにチャレンジしたり、困難を乗り越えていく力を高めるアイデアが得やすくなっていけば良いなと思います。